

# インプットからアウトプットへ

— コミュニケーション能力育成に向けた大学基礎教養英語教育の試み —

城一 道子\*・鈴木 哲平\*\*・大山 健一\*\*\*

## 1. はじめに

大学1年生の英語の習熟度がきわめて多様なのは本学に限らず、全国的な現象であろう。本学の現状を鑑みれば、中学校と高等学校において標準的な英語教育を受け、大学入学後も積極的に取り組みたいと考える学生から、これまでの英語学習が不十分であったり、大きく抜け落ちている部分があったりする学生、あるいは、何らかの理由で英語学習に対する動機づけがきわめて低い学生などがある。

英語の基礎知識や英語学習へのモチベーションをすでにある程度獲得している学生には、2017年度から新設した「インテンシブ・イングリッシュ」の受講を勧めている。ここでは、TOEIC受験への準備を一つの柱にしながら、総合的に英語力を養うプログラムが展開されている。一方で、英語の基礎知識が十分でない学生、英語学習にモチベーションを持つことが難しい学生に英語学習の新たな出発点を提供し、その学習の継続を可能にする英語カリキュラムの開発が、本学英語教育に課された大きな課題である。

本研究で行った調査でも改めて明らかになったことだが、本学入学者が大学入学以前に受けた英語教育は、その多くが文法・訳読方式であった。

文法・訳読方式は、かつて日本の英語教育で一般的に用いられていた方法であり、現在も多くの中学校・高等学校で行われている(杉田, 2016)。漢籍の翻訳という日本の知的伝統に根ざし、また、外国語を対象に自然言語という複雑なメカニズムを分析的に理解しつつ、自らの言語(この場合は日本語)への反省的意識とその精緻な使用を促すという点において、文法・訳読方式にはその利点があると言える。しかし、学生の多くが大学に期待している英語の運用能力(口頭で日常的な英語のやりとりができる)の獲得、TOEICなどの資格試験での成績向上という目的を達成するためには、文法・訳読方式が唯一の方法であるとは言えない。

こうして、最初の課題は、文法・訳読以外の英語学習の入り口を見つけることであった。では、どういう枠組みならば学生の関心、向上心を刺激することができるのか。

## 2. 「英語 I (表現)」設置のねらい

第二言語を習得するには、いかに効果的なインプットを受け、アウトプットを行うかが重要な鍵である。英語学習には「理解可能なインプット(comprehensible input)」に多く触れることが必要なのは言うまでもないが、インプットだけでは英語の習得にはつながらない。学習者はアウトプットをすることで自分の問題点(英語力のギャップ)に気づくことができ、自分のアウトプットに対しなんらかのフィードバックを受けることでこれを修正することができるようになる。このようなプロセスが、第二言語習得を促進する

2017年11月30日受付

\* 江戸川大学 子どもコミュニケーション学科教授 英語教育学

\*\* 江戸川大学 基礎・教養教育センター准教授 欧米文化文学

\*\*\* 情報文化学科助教 言語学, 外国語教育

(JACET SLA 研究会, 2013 他)。

日本の英語学習者の多くはインプットやアウトプットの機会が十分に与えられていないという事実があり、コミュニケーション能力の養成に向けて、多くの適切なレベルのインプットに学習者を触れさせ、アウトプットをする機会をいかに与えることができるかが授業に求められている。英語 I (表現) では、「インプットからアウトプット」に向けて、「理解可能なインプット」を保証し、アウトプットの機会につなげることを目的としている。

### 3. 「英語 I (表現)」の取り組み

大学の門をくぐる新入生の中には、アルファベットの文字列を読むことができない、ローマ字読みをしてしまうという学生がいる (城一, 2016)。彼らは読めないために単語を覚えられない、聴き取りもできないという困難を抱えている。

このような現状を踏まえると、まず、英語の文字列を読むことができる (できればスムーズに、さらに、英語らしい発音で) ということが何よりも重視されなければならない。そうでなければ、聴く、話すといった技術はおろか、読む、書くという能力の向上の土台そのものを欠いてしまうことになる。

「英語 I (表現)」は、文法的知識を用いた分析的英文読解や、反復による語彙の習得といった方法を離れ、歌や映画など、オーセンティックな教材をインプットおよびアウトプットの素材とし、歌を聴き、映画を観たのちにクラスメートの前で歌ったり、登場人物や声優を演じるなどの表現活動 (パフォーマンス) を行う授業である。言葉の形式ではなく、単語の意味、文全体の意味などに意識を向けることを優先し、認知能力による気づきを活かし、文法説明は最低限にする。こうして学生に、意味のかたまりをパターンとして覚えることが言語習得につながる (用法基盤モデル) ことを体感させることを目的としている。また、英語で話せるようになりたいというのも、多くの学生が英語教育に求めるものであるが、会話を行う

という行為は、頭の中に蓄えている語彙や構文の知識を「手続き的知識 procedural knowledge」として持つこと、言い換えると、無意識的に使えるようになるということである。手続き的知識は座学で習得できるものでなく、パフォーマンスという学習形態が適切である。

本学の 2017 年度新入生約 550 人ほぼすべてを対象に、どのクラスも受講学生が 30 人未満になるように、19 のクラスを用意した。各クラスの担当教員には事前に、上記のような科目設置のねらいと具体的方法を示しつつ、学生の動機付けを高められるような、彼らが面白い、楽しいと感じられるような教材を選んでもらった。授業ごとに扱った素材は異なるが、実際の授業で用いられた作品を具体的に挙げてみると、歌では “Take Me Home (Country Road)” (「カントリー・ロード」)、“Blowing in the Wind” (「風にふかれて」)、“We Are the World” (「ウィ・アー・ザ・ワールド」)、“I Want It That Way” (「アイ・ウォント・イット・ザット・ウェイ」)、“Let It Go” (「ありのままに」) などがある。また、映画としては *Frozen* (『アナと雪の女王』)、*Harry Potter and the Philosopher's Stone* (『ハリー・ポッターと賢者の石』)、*Up* (『カールじいさんの空飛ぶ家』)、*The Peanuts Love* (『I love スヌーピー』)、*Whisper of the Heart* (日本映画『耳をすませば』の英語版) などがあった。いずれの作品も、難解さが抑えられ、音声とそこに込められた意味を読み取り、学生がこれを再現するのに適切な素材と考えられる。

さらに、教室は学生がスキルを身につけ、友だちをつくり、自分自身を理解する場でもあり、動機づけのための基礎的環境を作り出すことの重要性が指摘されているが (ドルニエイ, 2005)、これらの再現活動をとおして、学生が互いに接触し、交流を持ち、共通の目標に向けて協働性を高められるような環境を作ることが可能になるであろう。

最後に、授業で扱われたこれらの教材が、学生が関心を持ちやすく、日常生活においても繰り返し触れることが容易な素材であることを強調しておきたい。

#### 4. 研究目的

本研究は、英語 I（表現）の授業について、以下の点を明らかにすることが目的である。

- (1) 学生は授業をどのように捉えたのか。
- (2) 学生にとってアウトプット活動はどのような意味を持つのか。

#### 5. 研究方法

##### 5.1 データ収集

2017 年度前期の英語 I（表現）の全 19 クラスの受講者のうちランダムに選んだ 6 クラス 141 名を対象とし、授業最終日（またはその前週）に実施した質問紙調査への回答および自由記述をデータとして収集した。

##### 5.2 分析方法

質問紙（資料 1）による質問項目は、「英語は好きですか」「英語を声に出して読むこと（音読）は好きですか」「英語を声に出して読めるようになりたいと思いますか」「英語の発音は上手になりたいと思いますか」「英語を話せるようになりたいと思いますか」の 5 項目である。質問紙の各項目については、5 段階（5：当てはまる、4：ど

ちらかといえは当てはまる、3：どちらともいえない、2：どちらかといえは当てはまらない、1：当てはまらない）で回答を求め、集計を行った。

自由記述欄には、「授業を振り返って、楽しかったこと、学んだこと、役に立ったこと、もっと知りたくなったことなど、思うこと」について自由に書くことを求めた。この自由記述データをすべてエクセルに入力し、そのうえで、本稿の共著者の 3 人で、データ中の重要だと思われる語句や文脈の解釈を行いながら、一文ごとに暫定的なコードをふり、生成されたコードを束ね、データを分類・整理した（オープン・コーディング）。その結果は、木下（2003）を参考に、分析ワークシート（資料 2）にまとめられた。その後、分析ワークシートをもとに、生成された概念を関連づけ、カテゴリーにまとめ、各カテゴリー間の関連を検討した。自由記述の解釈に際しては、「発音」「わからないことがわかったとき」など文脈が読み取れず意味の解釈が困難なもの、また、本研究と関連性がないと思われる記述は除外した。

#### 6. 結果

##### 6.1 質問紙による調査結果

質問紙の各項目に対する回答数をヒストグラムで示す（図 1）。「英語を話せるようになりたいと

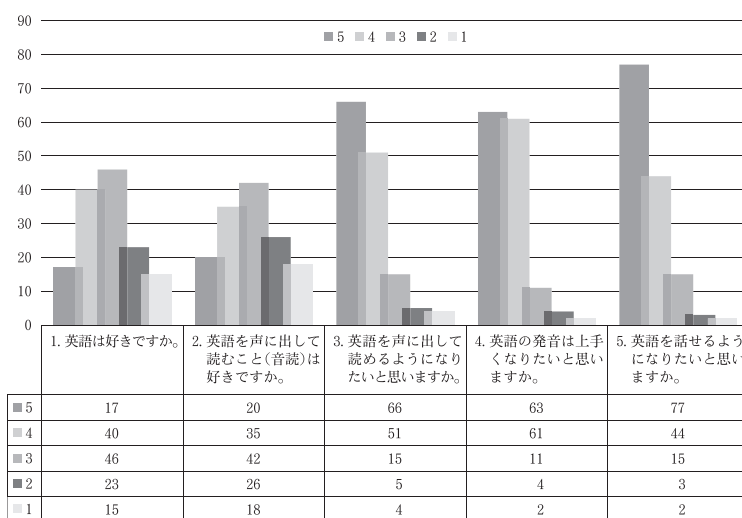


図 1 質問紙による調査結果 (n=141)

「英語は好きですか」という問いに「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した学生はそれぞれ77名、44名で全体の85.8%を占めている。「英語は好きですか」という問いには、肯定的な回答（「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」）40.4%（57名）、中間的な回答（「どちらともいえない」）32.6%（46名）、否定的な回答（「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」）は27.0%（38名）である。英語は必ずしも好きとは言えないが、英語は話せるようになりたいと思っている学生は多い。音読は英語を口にするための調音プロセスを鍛えるために効果的な練習法であるが、「英語を声に出して読むこと（音読）は好きですか」という問いに対し否定的な回答（「当てはまらない」「どちらかといえば当てはまらない」）は、31.2%（44名）であるが、「英語を声に出して読めるようになりたいと思いますか」という問いには83.0%（117名）が肯定的な反応を示している。さらに、「英語の発音は上手になりたいと思いますか」という問いには、肯定的な回答は全体の87.9%（124名）に達している。英語学習における音読や発音向上の必要性または有用性は学生に認識されていると言えるであろう。

## 6.2 自由記述の分析結果

自由記述の分析をとおして、【高校までとは異なる授業の取り組み】【アウトプットを促すインプット】【発音の学び直し】【発音練習の効果】【協働関係】【よりよい発音への関心】【役立つ英語】【アウトプットの必要性／有用性の認識】【広がる興味・関心】の9つのコード（概念）が生成された。これらの概念を包括的に説明するカテゴリーを生成していく過程で、「英語 I（表現）のアウトプットを支援するタスクの構造」（図2）が浮かびあがってきた。【】は概念、〈〉はカテゴリー、《》はコア・カテゴリーを示す。

このモデルによると、アウトプットを支援するタスクの構造とは、高校までの授業とは異なり、音声を中心に組み立てられた授業（【高校までとは異なる授業の取り組み】）は取り組みやすい、言い換えると、アウトプット活動を促しやすいインプット（【アウトプットを促すインプット】）が用意されており、活動に前向きになりやすい（〈取り組み易いインプット〉）。アウトプット活動に取り組む意欲は、英語の発音をアルファベットのひとつひとつの音から学び直す〈発音の学び直し〉（【発音の学び直し】【発音練習の効果】）という足

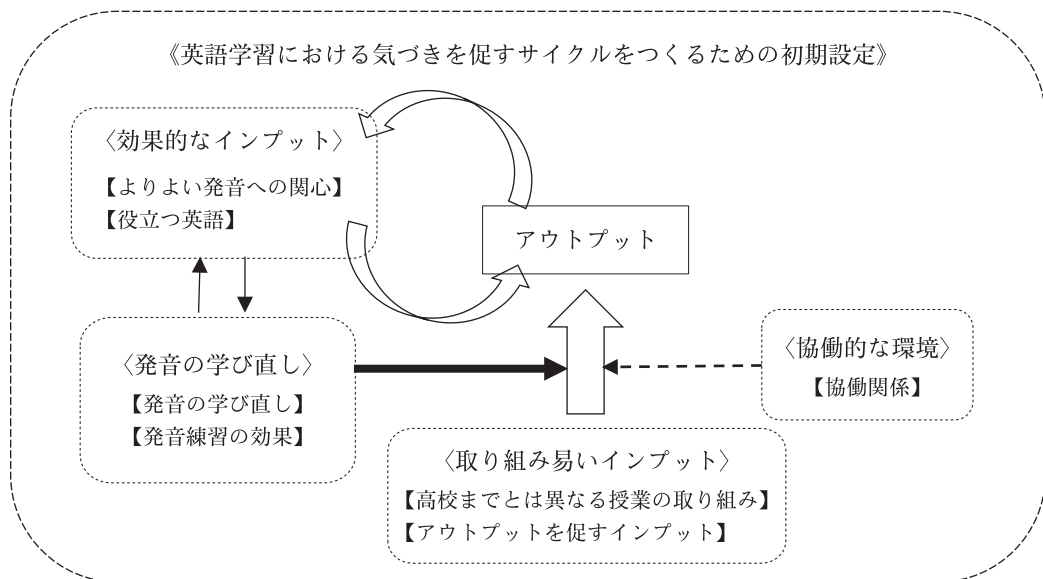


図2 英語 I（表現）のアウトプットを支援するタスクの構造

場がけにより、しっかり支えられる。また、協調的な雰囲気が醸成されるところでは、グループの構成メンバー同士の【協働関係】が生まれ、活動に主体的に取り組もうとする姿勢が育まれる。このような〈協働的な環境〉も活動に取り組む意欲を支える支援となる。

アウトプットは、実際に行ってみると、目標とする発音と自分の発音のギャップに気づくことで、よりよい発音への関心を生む。よりよい発音はまた聴き取りへの効果があることにも気づくことができる（【よりよい発音への関心】）。さらに、音声言語には語彙や文法事項など様々な言語項目が含まれており、身につけたい言語項目（【役立つ英語】）は音声をとおして理解されることも多い。このように発音や言語項目に対する気づきが〈効果的なインプット〉としてアウトプットに影響を与え、英語習得のプロセスを促す。

上記のモデルを《英語学習における気づきを促すサイクルをつくるための初期設定》として捉えると、英語習得に必要な《英語学習環境のカスタマイズ化》が《使える英語》へのプロセスを構築するという構図が見えてきた（図3）。この「学習者の動機づけを維持する学習環境」モデルでは、

喚起された動機づけを維持するためにいかに英語のインプットを日常生活に採り入れるかが鍵になる。普段の生活でできるだけ英語を意識して歌を聞いたり、字幕付きのドラマや映画を見たりする機会をもつこと、そして実際に歌ってみる、セリフをまねして言ってみるなどアウトプットの機会を少量でも意識的に持つことが、言語の本質に合った学習法として学習行動に結びつきやすく、動機づけの維持を図ることができることを示している。英語 I（表現）の授業により生じた興味・関心（【広がる興味・関心】）や英語学習におけるアウトプットの重要性の認識（【アウトプットの必要性／有用性の認識】）は、《内発的動機づけ》となり、学習行動を支えることを可能にする。

以上のような2つのモデルをとおして、授業が英語学習における気づきのサイクルをつくるための初期設定を行う役割を果たし、英語学習環境のカスタマイズ化をとおして学生の内発的動機づけが維持されることが可能になるという「学習者の動機づけを喚起し、維持するための口頭アウトプットの重要性」を説明・予測できる枠組みが理解できたと思われる。

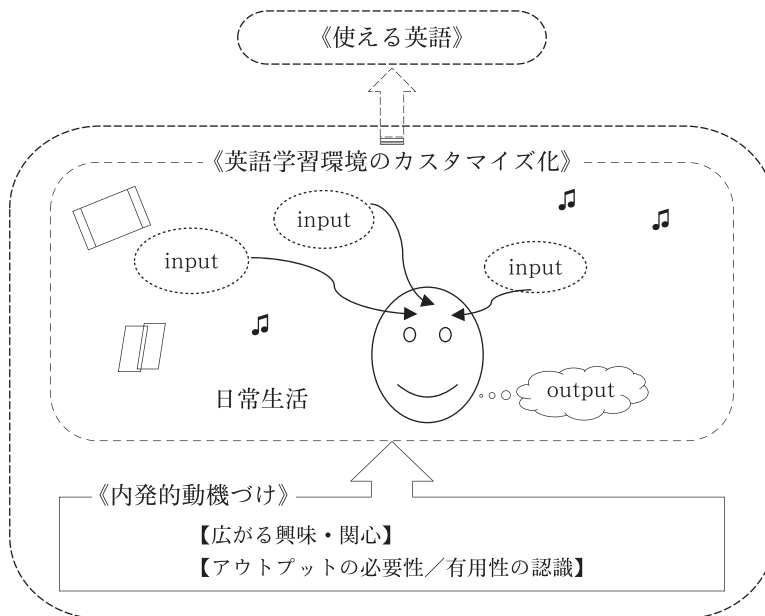


図3 学習者の動機づけを維持する学習環境

## 7. 考察とまとめ

取り組み易さは英語学習に前向きになれる重要な概念である。英語で話す能力を養うためにはインプットとともに口頭でのアウトプットの練習は不可欠であるが、英語音声に接する機会が少なく、口頭でのアウトプットの経験もほとんどない学生に対して、英語 I（表現）はアウトプットを支援する取り組みやすいタスクを提供することができたと考えられる。歌は好きでも英語の歌には関心がなかったり、映画も字幕を見たことがなかった学生にとって、歌や映画などを教材にしたアウトプット活動は、「感情をこめてしゃべったりして魅力的な授業」と捉えられ、「教科書の音読より効果を感じた」「英文をただ読むときより楽しく言える」「話して使ってみることが大事だ」など英語を口に出して練習することの効果を感じさせている。歌うことや映画のセリフを登場人物になりきって言うなどのパフォーマンスは、「感情や気持ちを伝える練習」となり、英語に「近づきやすく」なる方法として学生に受け入れられ、また、「英語に対する気持ちが変わった」「嫌いになった英語がまた好きになった」「普段の生活でも洋楽を聴いたり、歌詞を調べる機会が増えた」など動機づけにつながる事が明らかになった。

分析過程において、アウトプットには学生の気づきを引き起こす機能があり、学生自身が問題意識をもつことができることがデータから浮上した。たとえば、発音練習により、「単語を一つひとつ発音するわけではない」「ちゃんと発音しない部分がある」「英語を発音するにはリズムが大事」であることに気づき、「微妙な音の違いが少し聴きとれる」ようになり、聴き取りにも効果があることが理解されるようになっていく。アウトプット活動を加えることがインプットの処理にも影響を与えることはアウトプット理論において示唆されていることであるが、今回の調査結果においても気づきのサイクルが、音声面だけでなく、言語知識を含む英語力の向上につながる事が示唆されている。

英語で話す、使える英語を身につけるために、白井（2012）は、アウトプットは少しでもいいから頻繁に行うか、アウトプットは実際にしなくてもよいが、頭の中でリハーサル（復唱）を行うような状況をつくることを勧めている。リハーサルは学習者のなかでインプットを活性化させる知的なプロセスでもあると述べられており、実際、さまざまな気づきを促す働きがある。インプットとアウトプットをつなぐ活動としてもリハーサルは効果的である。声に出して復唱することで語彙や構文を意味のかたまりとして丸ごと記憶できるというだけでなく、復唱というアウトプットにかかわる調音プロセスを鍛えることができるからである。授業がきっかけとなり、日常生活において学生自身ができるだけ多くの英語インプットを取り入れ、少量でもよいから意識的にアウトプットをすることが、使える英語を身につけることにつながるであろう。動機づけを維持するのは大変であるが、学生自身が選んだ素材を使うことで内発的動機を維持できる。アウトプットに効果的な素材は、「感情に訴える」もの、「自分のこと」であるという（白井，2009）。自由記述に「自己紹介が役に立った」「自己紹介をスラスラいえるようになった」などの記述も見られたが、使える英語の第一歩であろう。

英語 I（表現）の授業で導入された歌詞や映画（アニメも含む）のセリフは、身近な英語として感情移入しやすく、習得したい発音、発話のモデルの取り入れ口になった。インプットとして有効なのは、①ある程度の理解度が保証できるもの、②感情に訴えるもの、③自分にとって意味のあるもの（白井，2012）である。英語の歌詞やセリフは、このような条件を満たし、しかもオーセンティックな素材として文化的な背景があり、質的にも高く、「歌の歴史などの背景を知り、歌詞の内容を深く理解できた」など、大学生の知的レベルにも十分応えることができたと考えられる。

最後に、英語 I（表現）におけるアウトプットを支援するタスクの構造や学習者の動機づけを維持する学習環境のモデルは、学生一人ひとりの内面や行動まで捉えることはできない。対象となる

データも一部に限られており、教材も担当教員によって異なっているので、モデルの説明力は十分とは言えないが、新たな検討課題を見出すためのモデルとして役に立つと考えている。今後も関連するデータをできる限り幅広く収集し、モデルの信頼性を高めていく努力をしたい。

#### 参考文献

ゾルタン・ドルニェイ (著) / 米山朝二・関昭典 (訳)  
 (2005) 『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』大修館書店.  
 JACET (大学英語教育学会) SLA 研究会 (編)  
 (2013). 『第二言語習得と英語科教育法』 開拓社.  
 城一道子 (2016) 「フォニックス・ライム・チャンツ・

歌を活用した発音指導の教育効果—TAE (Thinking at the Edge) を応用した分析—」 『江戸川大学教職課程センター紀要 教育総合研究』 Vol. 4, 1-12.  
 木下康仁 (2003). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』 弘文堂.  
 白井恭弘 (2012). 『英語教師のための第二言語習得論 入門』  
 白井恭弘 (2009). 「インプット処理の質をいかに高めるか」 『英語教育』 Vol. 57, No. 12, 25-27.  
 杉田由仁 (2016). 「『使える英語』が身につく英語授業のイメージ—高校英語授業に関する予備調査から—」 JACET 関東支部紀要, Vol. 3, 34-45.  
 竹内理・水本篤 (編著) (2012) 『外国語教育研究ハンドブック 研究手法のより良い理解のために』 松柏社.

## 資料1 英語 I (表現) に関するアンケート (今後の授業の参考のために)

|  |                           |              |   |     |   |   |
|--|---------------------------|--------------|---|-----|---|---|
| 学籍番号：  |                           |              |   |     |   |   |
| 氏 名：   |                           |              |   |     |   |   |
| 次の質問に項目毎に5段階で答えてください。<br>5：当てはまる      4：どちらかといえば当てはまる      3：どちらともいえない<br>2：どちらかといえば当てはまらない      1：当てはまらない |                           |              |   |     |   |   |
| 1  | 英語は好きですか。                 | 5            | 4 | 3   | 2 | 1 |
| 2  | 英語を声に出して読む(音読)ことは好きですか。   | 5            | 4 | 3   | 2 | 1 |
| 3  | 英語を声に出して読めるようになりたいと思いますか。 | 5            | 4 | 3   | 2 | 1 |
| 4  | 英語の発音は上手になりたいと思いますか。      | 5            | 4 | 3   | 2 | 1 |
| 5  | 英語を話せるようになりたいと思いますか。      | 5            | 4 | 3   | 2 | 1 |
| 自由記述欄：<br>授業を振り返って、楽しかったこと、学んだこと、役に立ったこと、もっと知りたくなったことなど、思うことを自由に書いてください。                                   |                           |              |   |     |   |   |
|  |                           |              |   |     |   |   |
| 高校までどのような授業を受けてきましたか。(例えば、テキストを読んで訳す、英語を使う授業、など)   |                           |              |   |     |   |   |
|  |                           |              |   |     |   |   |
| この授業のほかに「インテンシブ・イングリッシュ」を受講している。   |                           | はい           |   | いいえ |   |   |
| 「インテンシブ・イングリッシュを受講したい」   |                           | はい           |   | いいえ |   |   |
| 上記の質問に「はい」と答えた方へ いつ頃受講したいですか。  |                           | 後期 2年次 3年次以降 |   |     |   |   |



資料2 分析ワークシート

|         |   |
|---------|---|
| 概念名     | 高校までとは異なる授業の取り組み  |
| 定義(説明)  | 音声言語を中心とした授業への評価  |
| バリエーション | <p>高校までと違い、英語を楽しむことができる授業構成だった。<br/>                 高校までの主に文法を中心とした授業と異なる。<br/>                 テキストを基本とした授業じゃない。<br/>                 教科書中心ではなく、歌や漫画などを使って熟語や発音などを勉強できて楽しかった。<br/>                 歌を歌う発表やアフレコの発表が高校までの授業と全く違って楽しかった。<br/>                 英語の歌を使った授業は今までしたことがなかったが、とても楽しく受けることができた。<br/>                 勉強や暗記だけでなく、歌を歌ったり、アテレコをしたりする機会があって楽しく参加できた。<br/>                 歌ってテストするというのはとても新鮮だった。ワークするよりこっちのほうが楽しいし身につくなあと思います。<br/>                 映画を見て学ぶのは楽しい。<br/>                 英語で表現することが楽しかった。<br/>                 会話の授業のようで楽しかった。<br/>                 英語が身近になった気がする。<br/>                 英語に対する気持ちが変わった。<br/>                 のびのびやれた。<br/>                 嫌いになった英語がまた好きになった。<br/>                 ワークやらなきゃとか単語覚えなきゃとか学校行きたくなかったけれど、歌だと電車の中とかで聞いてればよいので楽しかったし、学校もバリバリ来ました。</p> |
| 考察      | 音声言語を中心とした高校までとは異なる授業の取り組みにやる気みえる。やる気の失せていた英語の授業に取り組もうという動機づけが喚起されている。  |

|         |   |
|---------|---|
| 概念名     | アウトプットを促すインプット  |
| 定義(説明)  | 教材としての歌や映画はアウトプットを促す取り組み易いインプット   |
| バリエーション | <p>日本の映画を英語で見たり、話して見るのは面白かった。<br/>                 映画のアフレコが難しかったけど楽しかった。<br/>                 歌やアテレコで楽しく学べた。<br/>                 歌は楽しかった。芝居は難しかった。<br/>                 歌で学ぶのはよかった。<br/>                 歌を通して発音するのは覚えやすくてよい。<br/>                 滑舌がよくなってきれいな発音で歌いたい。<br/>                 歌を練習して覚えるのは楽しい。<br/>                 歌が好きなので取り入れられて楽しかった。<br/>                 歌うことは楽しかった。<br/>                 歌のテストは楽しかった(個別なら)。<br/>                 知らない歌を歌うことができ意外と楽しかった。<br/>                 最初はできないと思ったけど授業をとおして歌を歌うことに慣れた。<br/>                 毎回本気で歌うことができた。<br/>                 カラオケで英語の歌を歌ってみたい(ララランドの City of Stars, タイタニックの My Heart will Go On, レ・ミゼラブルの民衆の歌など)。<br/>                 自分はアップテンポの曲のほうが覚えやすい。アップテンポの洋楽を聴いて少しでも歌えるようになったらいいなと思いました。<br/>                 アップテンポのものもやってみたかった。<br/>                 もっと英語の歌を歌ってみたいと感じた。<br/>                 最近の洋楽を歌いたかった。<br/>                 歌を歌えるようになりたい。<br/>                 もっと歌いたい。</p> |

|     |   |
|-----|---|
|     | 洋楽の発音がかっこよかった。<br>カラオケで友達に褒められるくらいにはうまく発音できるようになった。<br>カラオケで友達に褒められるくらいにはうまく発音できるようになった。    |
| 考 察 | 教材としての歌や映画はアウトプット活動に有効。英語学習に前向きになれる。自身の英語レベルを超えるインプットレベルでも動機づけにつながるし、アップテンポの曲は流暢さや聴く力につながる。 |

|         |   |
|---------|---|
| 概念名     | 発音の学び直し   |
| 定義（説明）  | 発音の基礎をしっかりと学ぶことの必要性   |
| バリエーション | 発音の授業は初めて。<br>発音の基礎から学んだ。<br>発音がしっかり理解できた。<br>発音のことをよく学ぶことができた。<br>英語の発音を多くやって、勉強になった。<br>発音をここまで詳しく教えてもらうことがなかったので受講してよかった。<br>高校までとは違う視点から発音やイントネーションを学べたので楽しめた。<br>この授業は発音を中心とした学習で楽しく学ぶことができた。<br>一つひとつの発音を細かく学ぶことができたのでよかった。<br>ここはこう読む、このスピードで読むというようなこと（を学んだ）。<br>同じアルファベットでも発音が違う。<br>今まで意識してなかった発音を知った。<br>発音にいろいろな種類があること（がわかった）。<br>間違った読み方などを正しく覚えることができた。<br>歌やフォニックスをとおして発音を改めて学びなおすことができた。<br>フォニックスをもっと知りたいとおもった。<br>発音などはわりと簡単だったので、もう少しレベルアップした長い単語でもついていけると思う。 |
| 考 察     | 発音についてしっかりと学ぶ機会がこれまであまりなかったが、発音の仕方を学んで文字と発音の関係などあらためて発見があり、発音について学びなおすことの意味や効果を感じている。   |

|         |   |
|---------|---|
| 概念名     | 発音練習の効果   |
| 定義（説明）  | 発音の練習をすることで英語に慣れる   |
| バリエーション | 発音に少し慣れることができた。<br>早口英語で英語になれた気がする。<br>英語の発音がよくなった気がする。<br>前よりは、発音することに抵抗がなくなった。<br>発音やアクセントが、意識的でなく、無意識的にできるものが少し多くなった。<br>微妙な音の違いが少しききとれるようになった気がする。<br>英語にはちゃんと発音しない部分があった。<br>I've が「ア」としか言っていない。<br>もっとリスニングに自信をつけたい。<br>少しでもききとれるようにがんばりたい。<br>きちんと発音できるようになりたい<br>もっと上手に発音できるようになりたい。<br>読むの（音読）がもっとうまくなりたい。<br>もっとすらすら読める（音読）ようになりたい。 |
| 考 察     | 発音の練習をすることで聴き取りにもよい影響を感じている。英語らしい発音をすることへの動機づけも生まれている。  |

|         |   |
|---------|---|
| 概念名     | 協働関係  |
| 定義（説明）  | グループワークにおける協働的な関係は主体的な行動を促す   |
| バリエーション | 発表することにより、グループでコミュニケーションをとるので、よかった。<br>3人で（セリフを）読むのは楽しかった。歌のほうもさらに楽しかった。<br>周りの雰囲気がよく、気軽に発言できた。<br>人前で歌うのは緊張していたが、何度かやるにつれて、同じグループの人たちと仲良くなれて、コミュニケーションを取りながら楽しく発表できるようになった。<br>人の発音をきいて、自分の発音を見直した。<br>思ったようにしゃべれなかったので、リベンジしたい。 |
| 考 察     | グループ・ワークで協調的・協働的な雰囲気があるところでは、学生の主体性が促され、やる気につながる。   |

|         |   |
|---------|---|
| 概念名     | よりよい発音への関心  |
| 定義（説明）  | 個々の発音やリズムやイントネーションへの意識が高まる  |
| バリエーション | 高校までの発音とは全くちがいで、最初は難しかった。<br>フォニクスは難しかったが、英語を話しているっていう気持ちを感じられた。<br>カタカナではなく、口の開き方や声の大きさなどに気を付けて発音する。<br>発音のしかた、つなげて読むことなど（を学んだ）。<br>単語一つ一つを発音するわけではない。<br>発音の規則（短縮など）が分かった。<br>つながる音が少しできるようになった。<br>つなげて読む、単語のリズム等を楽しく覚えられてよかった。<br>英語を発音するのにイントネーションやリズムが大事だということがわかった。<br>イントネーションの上がり下がりで捉えられる意味が異なる（ことがわかった）。<br>発音に注意しなければならない。<br>英語の発音が難しい。<br>発音をもっと意識していきたい。 |
| 考 察     | アルファベットの一つひとつの音をあらためて学ぶことがカタカナ読みでない発音につながる。<br>リズムやイントネーションを学ぶことで単語単位から語句や文単位での発音の仕方にも意識が向いている。英語の発音は難しいが、英語らしい発音・流暢さに対する関心が生まれている。   |

|         |   |
|---------|---|
| 概念名     | 役立つ英語   |
| 定義（説明）  | 会話表現を身につけたい   |
| バリエーション | 自己紹介が役に立った。<br>自己紹介をスラスラいえるようになった。<br>しっかりした自己紹介ができるようになった。<br>話せたらカッコいいと思っていたので、少しだけでも話すことができたからよかった。<br>バイトでのちょっとした英語での受け答えができるようになった。<br>すぐにつかえる英語から始めたのがよかった。<br>英語の歌や映画を見て、少しでもしゃべれるようになりたい。<br>何か少しでも話せるようになりたい。<br>もっと英語でしゃべれるようになりたい。<br>もっと会話表現を知りたい。<br>外国人に道を聞かれてもちゃんと説明できるようになりたい。<br>外国に行った時によく使えるような英文のフレーズとかを学びたい。<br>話し方、聞き方もだんだん上達したい。 |

|     |                          |
|-----|--------------------------|
| 考 察 | 使える英語を身につけたい。自己紹介は使える英語。 |
|-----|--------------------------|

|         |   |
|---------|---|
| 概念名     | 広がる興味・関心  |
| 定義（説明）  | 授業をとおして映画の字幕や音楽の英語に関心をもつ  |
| バリエーション | <p>映画や音楽の英語がわかれば世界が広がる。<br/>         歌の歴史などの背景を知り、歌詞の内容を深く理解できた。<br/>         歌をとおして社会の動きを学んだり、興味を持って、楽しかった。<br/>         歌詞の意味を調べておくことで、歌いながら、今、こんな内容を英語でうたっているんだなと思<br/>         いながらできた。<br/>         普段の生活でも洋楽を聴いたり、歌詞を調べる機会が増えた。<br/>         歌の意味を知ったり、知っている曲を英語で歌えるようになった。<br/>         洋楽を聴く機会もなく、歌う機会もなかったがこの授業をとおしていろいろ知ることができてよ<br/>         かった。<br/>         洋楽をもっと聴いて自分で意味を理解できるようになりたい。<br/>         今まで全然聞いていなかった洋楽を聴くようになった。<br/>         英語の歌をこの機会に歌ってみて英語の歌に興味が出てきた。<br/>         洋楽を聞いてみたり、内容を知っている映画を英語バージョンで観たりしたい。</p> |
| 考 察     | 英語の歌（洋楽）を聞くことや映画を字幕で見るだけでなくその背景に関心を持つようにな<br>る。日常生活に結びつくと興味・関心を引き起こしやすい。歌もただ聞くのではなく、意味を知<br>りたいという欲求が生まれる。  |

|         |   |
|---------|---|
| 概念名     | アウトプットの必要性／有用性の認識   |
| 定義（説明）  | 口に出して練習することの効果を感じる  |
| バリエーション | <p>勉強したことをそのままにしないで発表という形でアウトプットできる場があってよかった。<br/>         発音、声に出して読む機会が多く入っていたのでよかった。<br/>         歌やアフレコをとおして英語を読むことで英文をただ読むときより楽しく言えたので良かった。<br/>         歌詞や映画のセリフを感情をこめてしゃべったりして、魅力的な授業だった。<br/>         歌での発表や映画のアテレコといった少数人数ならでの英語表現の授業だった。文法をやるより将<br/>         来役に立つと思う。<br/>         感情や気持ちを伝える練習が、これから役に立つと思う。<br/>         歌うのが好きなので楽しかった。教科書の音読より効果を感じた。<br/>         話して使ってみることが大事だと思った。<br/>         歌やセリフで近づきやすくなった。<br/>         声に出すと覚えやすい。<br/>         発表は自分のやりたいものでやりたい。</p> |
| 考 察     | アウトプットは必要。声に出すことで英語に近づきやすくなり、楽しさや効果も感じられてくる。<br>アウトプットをプラスすることの重要性。   |